

## 自ら人間関係を広げる子どもを育てる学級活動（１） ～ ありがとうカードを使った振り返り活動の工夫 ～

### 要 約：

近年の子どもを取り巻く環境の急速な変化を受けて、学習指導要領解説特別活動編においては、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい生活づくりに参画する態度を育成することが一層重視されている。また、中学年の学級活動の内容として、「協力し合って楽しい学級生活をつくるとともに、日常の生活や学習に意欲的に取り組もうとする態度の育成に資する活動を行うこと」が示されている。そこで、自ら人間関係を広げ、つながりをつくる子どもの育成をねらう本主題は意義があると考えられる。そして、研究主題を達成するために、子どもたち同士が人間関係の広がりを実感し、また、自他のかかわり方を評価し合いながら、自らいろいろな友達にかかわろうとする意欲を高め、人間関係を広げる子どもを育てるために、副主題を「ありがとうカードを使った振り返り活動の工夫」と設定し、取り組むこととした。

実践Ⅰでは、みんな遊びの課題を話し合い、「男女なかよし集会」に取り組んだ。

- (1) 男女が仲良くなるために何ができるかを決める話し合い活動
- (2) 男女がかかわりあえるようなルールで行う集会活動
- (3) 集会で交流した友達に送る、つながりを視覚化する振り返り活動

実践Ⅱでは、前回の集会から出た課題を話し合い、全員で参加できる集会にするために「えがおでつながろう集会」に取り組んだ。

- (1) 勝ち負けがなく、全員が参加できる集会にするための話し合い活動
- (2) 子どもたちが協力して取り組み、一緒に喜ぶことのできる集会活動
- (3) 集会で交流した友達に送る、つながりを視覚化する振り返り活動

実践Ⅰ・Ⅱのどちらにおいても、集会をおえて、友達に対してありがとうを伝えるための振り返り活動を行い、つながりの視覚化を行った。

実践の結果、以下のような成果（○）と課題（●）を得た。

- 「ありがとうカード」で友達とのつながりを視覚化することで、人間関係の広がりを実感することができた。また、友達からカードをもらうことで、どのようなかかわり方が人間関係を広げるのか考えることができた。
- 「ありがとうカード」を使った振り返り活動を定着させたことで、集会の目的を意識して活動することができ、「ありがとう」カードの枚数が増えることで活動への満足感や、もっとみんなと仲良くなりたいという思いをふくらませることができた。
- カードが増えない子や意欲の高まらない子の姿が見られた。視点の持ち方やカードの形式を工夫することで友だちからのかかわりを視覚化する必要があった。
- つながりを実感することの苦手な子どもに対しての手立てが不十分だった。「ありがとうカード」だけでなく集会を終えての感想を書くなど子どもたち一人ひとりの集会に対する思いも把握する必要があった。

キーワード：学級活動 振り返り活動 ありがとうカード

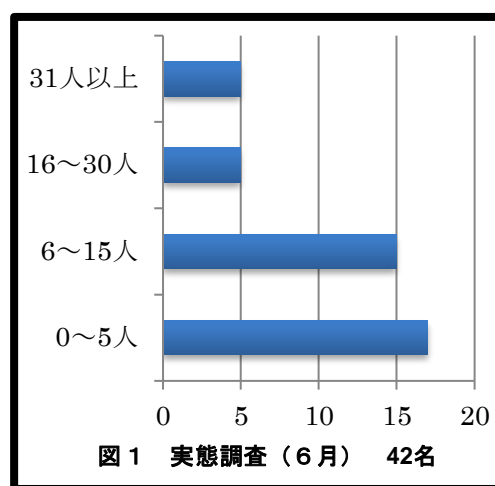
## 1 主題設定の理由

### (1) 現代社会の要請と特別活動のねらいから

近年、国際化や情報化、価値観の多様化が進み、子どもを取り巻く環境が急速に変化していることを背景に人間関係の希薄化が問題となっている。そのため、よりよい生活を築く力や好ましい人間関係を築く力を身に付けることが求められている。これを受けて、学習指導要領解説特別活動編においては、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい生活づくりに参画する態度を育成することが一層重視されている。また、中学年の学級活動の内容として、「協力し合って楽しい学級生活をつくる」とともに、日常の生活や学習に意欲的に取り組もうとする態度の育成に資する活動を行うことが示されている。これらのことから、自ら人間関係を広げ、つながりをつくる子どもの育成をねらう本主題は意義がある。

### (2) 子どもの実態

図1は、3年生に進級して2ヶ月がすぎた6月に行ったアンケートの結果である。「3年1組を仲良く・楽しいクラスにするためにどのくらいの友だちと力を合わせていますか」という質問に対して「31人以上」もしくは、「16人～30人」と答えた子どもはそれぞれ5人と少なく、残りの32人はクラスの半分以上と協力できていないと答えた。また、どのようなことで力を合わせているか質問すると、「クラス遊びの時にさそう」「掃除の時に声かけをする」という答えが見られた。こ



このことから、本学級の子どもたちは、決められたグループの中では声をかけ合って活動できているが、日常生活の中で自ら友達にかかわり、人間関係を築くことに課題があると考えた。そこで、「自ら人間関係を広げる子ども」の育成を目指し、本研究主題を設定した。

### (3) これまでの指導の反省から

1学期の学級活動（1）の指導を振り返ると、実践を行った後の振り返り活動の中で、子どもたち同士で人間関係の広がりを実感し、次の実践への意欲を高める活動ができておらず、題材と題材をつないで人間関係をつくっていくことが不十分であった。そこで、子どもたち同士が人間関係の広がりを実感し、自らいろいろな友達にかかわろうとする意欲を高め、人間関係を広げる子どもを育てるために、副主題を「ありがとうカードを使った振り返り活動の工夫」と設定した。

## 2 主題の意味

### (1) 主題「自ら人間関係を広げる子ども」とは

協力し合って、楽しいクラスをつくるために、自分の意思で、かかわる友だちの数をふやす子どものことである。

図2のように、友達とのかかわりが不十分である子どもたちが、目標や方法を話し合い、協力して取り組む活動を通して、「みんなともっと話したい」「あの子どもと一緒に遊びたい」という思いをもち、かかわる友達の数を増やすことができる姿である。そこで、話し合い活動では、課題を共有し、みんなで決めることのできた充実感や実践活動への見通しをもたせる。次に、実践活動や振り返り活動では、かかわる友達の数を増やすことができた満足感を味わい、次の題材に向けて意欲を高める子どもの姿をめざす。

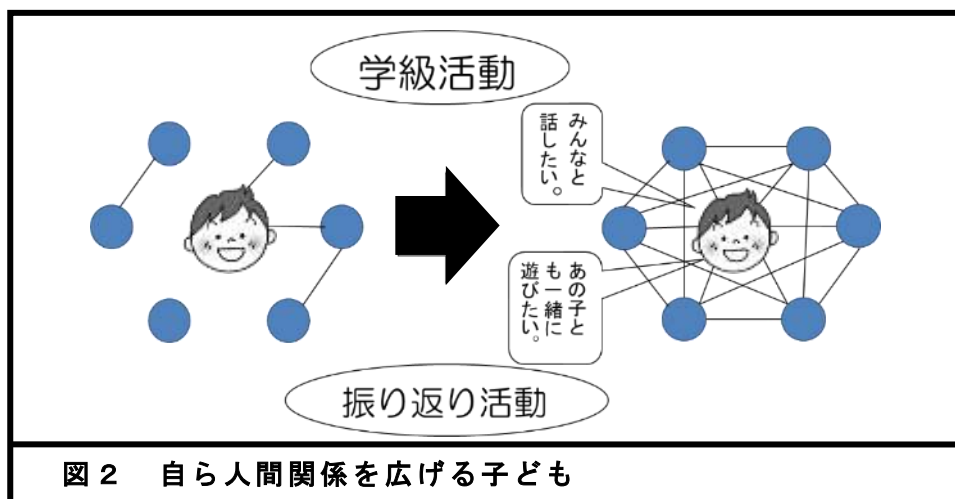
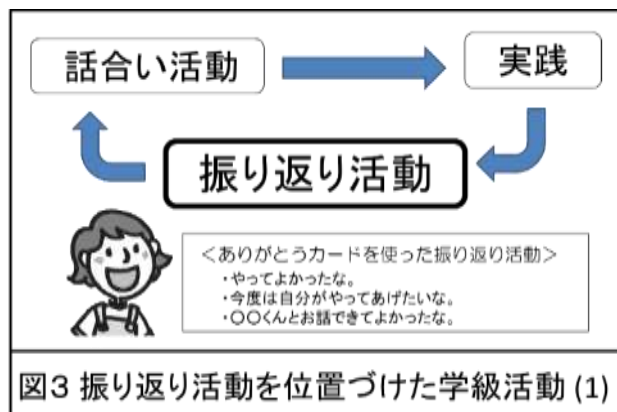


図2 自ら人間関係を広げる子ども

(2) 副主題「ありがとうカードを使った振り返り活動」とは

実践後に人間関係の広がりを実感し、次への意欲を高めるために、カードへの記述とやり取りを通して、互いのかかわり方を評価し合う活動のことである。

これまでの実践では、同じ場で活動はしているものの、いつも同じ友達と同じようなかかわり方をしている子どもが多く、自分たちのかかわり方を振り返る場を設けていなかった。そこで、図3のように、話し合い活動・実践活動を行った後に、互いのかかわり方が評価できるように「ありがとうカード」を使った振り返り活動を位置づける。



「ありがとうカード」を使うことで、自分と友達、両方のかかわり方に目が向くようにし、「やってよかった」「今度は自分がしたい」など次への意欲をもつことができるようにし、かかわることの心地良さを実感し、自ら人間関係を広げる子どもを育てる。

### 3 研究の目標

ありがとうカードを使った振り返り活動の工夫を通して、自ら人間関係を広げる子どもを育てる第3学年学級活動(1)の指導の在り方を究明する。

#### 4 研究の仮説

自ら人間関係を広げる子どもを育てるために、ありがとうカードを使った振り返り活動を位置づけるとともに、以下の2点を工夫することが有効であろう。

- ① 目指す子ども像を見通した、題材・議題の選定
- ② 集団の目標や活動の目的に向かう姿をふやすための適切な教師の支援

#### 5 研究の内容と方法

##### ① 題材・議題の選定の工夫

「自ら人間関係を広げる子ども」を育てるために、かかわりを増やすことのできる集会活動に取り組む。そのために、「男女仲良くなるう」「いろいろな友達とかかわろう」など集団活動の目的を明確にし、子どもたちが意欲をもって取り組むことのできる題材や議題を選定する。

##### ② 振り返り活動における「ありがとうカード」の活用の工夫

「ありがとうカード」を使った振り返り活動を位置づけ、互いのかかわりが増えていく過程を視覚化することで、次の集会に対する意欲や友達へのかかわり方に関する自身の目標をもつことができるようにする。

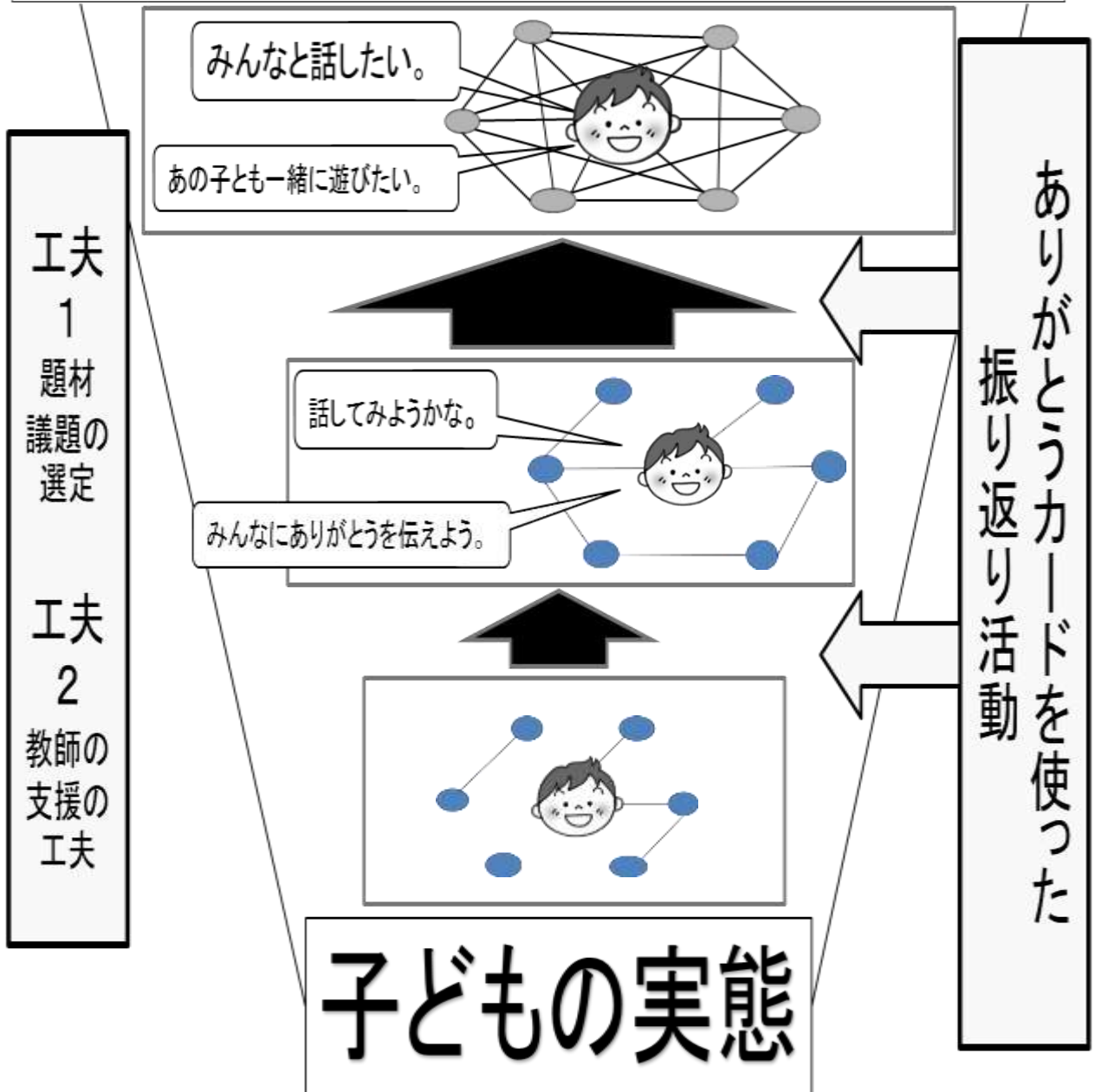
「自ら人間関係を広げる子ども」の評価基準を次のように設定する。

- 題材に見通しをもち、集団の目標や活動の目的に近づくために、自分の意志でいろいろな友達にかかわりながら活動しようとする。 【関心・意欲・態度】
- 集会活動や振り返り活動の中で、よりよいかかわり方を考え、いろいろな友達にかかわっている。 【思考・判断・実践】
- 自らかかわる友達の数を増やし、人間関係を広げていくことは楽しい学級生活をつくるということを理解することができる。 【知識・理解】

#### 6 研究の計画

月	研究内容	月	研究内容
5月	理論研究	10月	教材研究
6月	理論研究・実態調査	11月	検証授業2
7月	理論研究	12月	データ分析
8月	教材研究	1月	研究のまとめ
9月	検証授業1	2月	研究報告

# 自ら人間関係を広げる子ども



## 8 研究の実際

### (1) 実践事例 I 「男女なかよし集会をしよう」の実際と考察

#### ① 事前の活動

子どもたちは、遊び係を中心に週1回のみんな遊びを行っているが、みんな遊びの中でも同じ友達と過ごす姿が多く見られ、いろいろな友達に自分から声をかけようとする姿が少ない。また、女の子どうし男の子どうしで過ごす時間が多く、男女仲よく遊ぶ姿も少ない。そこで、人間関係を広げ、クラスが仲良くなるためにはどうしたらいいのか考える時間を位置づけ、自分たちの行っているみんな遊びの問題点を話合った。そして、子どもたちの中から「男女がかかわりあえる集会をしたらどうか」という意見が出され、「男女なかよし集会をしよう」という議題が選定された。

議題選定においては、「男女がもっと仲良くなるために必要なこと」を、男女混合の小グループで話し合い、全員が考えをもつことができた。また、自分たちのクラスの課題を考えることで学級会では何を話し合うのか見通しをもつことができた。

#### ② 学級会「男女なかよし集会」についての話し合い活動

子どもたちの実態として、2年生までに話し合い活動の経験が少なかったため、はじめは、話し合いを成立させることを重視し、司会グループを固定して行った。また、話し合いの形態として、話し合いの中でもたくさんの意見が交流できるように、資料1のように4人1グループで行った。話し合いでは、資料2のように、「ありがとうがでる」「協力できる」といった言葉が意見の中に多くあった。しかし、子どもたちの意見の中には、魚釣りやしっぽとりなど、普段自分たちが遊んでいる好きな遊びを提案する姿も見られた。

司会を固定したことは、話し合いをスムーズに進めるためには必要であったが、話し合いでもいろいろな意見に触れ、かかわりを増やすために司会グループも輪番として行うようにした。資料2の波線部のように「協力」や「ありがとう」という言葉は、友達とかかわることを意識した発言であり、めざす姿であると考える。また、下線部アのような子どもに対しては、何をねらいとした学級会なのか話し合いの中でも伝えていく必要があると考える。



資料1 話し合いの様子

- 児①：お互いにありがとうが言えるものにしたらいいと思います。  
児②：「バナナおに」がいいと思います。助け合いも協力もできるからです。  
児③：「フルーツバスケット」は、いろんな人ととなりになれるからいいと思います。  
児④：「フルーツバスケット」は、協力が難しいと思います。  
児⑤：私も、バナナおにに賛成です。わけは、協力もできるしいろいろな人に「ありがとう」を伝えることができるからです。  
司会：いろいろな意見が出されたので遊びを多数決で決めていいですか。

最後は、多数決で「バナナおに」と「ドッヂー」に集団決定をした。

資料2 話し合いの流れ（抜粋）

### ③ 実践

バナナおにでは、タッチされた人を男女のペアで助けるというルールをつくり、遊びを行った。遊びの中では、タッチされた人を助けるために、男女が互いに声をかけ合う姿が見られた。また、資料3のドッジビーではフリスビーを譲っている友人に投げさせようとする姿も見られたが、捕ることや投げることが苦手な子はコートで動かなかったり、得意な子が何回も投げたりと、時間がたつにつれて、人間関係を広げようとする姿が少なくなっていくた。

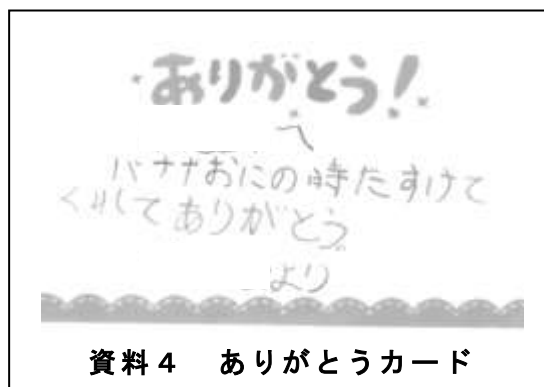


資料3 集会（ドッジビー）の様子

下線部アのように、「男女なかよく」という視点をもってゲームにのぞむことで、男女仲よくするためにどんなバナナおにをすればよいか考えることができた。これは、子どもたちがバナナおにを通して、かかわりを広げたいと意識できていたからではないかと考える。しかし、下線部イのように、人間関係を広げようとする姿が少なくなっていくたのは、ドッジビーをする中で、助け合いや協力をどのようにすればよいのか子どもたちがイメージできていなかったことが考えられる。また、バナナおにのように、「男女なかよく」という視点でルール作りを行わず、実践してしまったことも原因であると考えられる。

### ④ 振り返り活動

集会を終えての振り返り活動では、ありがとうカードを書いて友だちへありがとうを伝えた。男女で互いにカードを贈りあう姿も見られた。バナナおにでは、いろいろな友達と交流する時間があつたので資料4のように「助けてくれてありがとう。」や「一緒に協力できてうれしかった」などをカードに書く姿が見られた。しかし、ドッジビーでは、フリスビーを譲ってもらった子は書くことができたが、参加に消極的だった子は、ドッジビーのことで書くことができなかった。また、カードの交換をしたときに書いた枚数にも差があつたので一人ひとりもらえる枚数に偏りがあつた。



資料4 ありがとうカード

振り返り活動では、集会の振り返りを行ってから書く時間を設定することで、どのようなことで「ありがとうカード」が書けるか、考えることができた。また、男女が協力するルールを作ったことで「男女なかよく」が意識することができ、下線部アのようにそれぞれが異性に対してカードを送る姿も増えたと考える。しかし、下線部イのようになったことで、人間関係の広がりや次の集会に向けての意欲を十分には高めることができなかった。

(2) 実践事例Ⅱ「みんながえがおでつながる集会をしよう」の実際と考察

① 事前の活動

前回の「男女なかよし集会」での課題を振り返り、つながりを広げるためにどうしたらよいか考え、議題の選定を行った。集会や休み時間を通していろいろな友達と遊ぶ様子が見られる子どもたちだが、「もっといろいろな友達とかかわりたい・もっと仲良くなりたい」という思いをもとに「みんながえがおでつながろう集会をしよう」という議題が選定された。

前回の集会を振り返り、議題の選定を行うことで、課題が明確になり集会の目的をどんなことにすればよいか子どもたちが考えることができた。また、「みんなとつながる」という学級目標達成のために集会活動を継続して行うことで、見通しがもちやすくなり、意欲の継続にもつながった。

② 学級会「えがおでつながろう集会」についての話し合い活動

学級会では、考えを出し合う→賛成・反対を話し合う→集会での内容を決める手順で話し合いを進めた。笑顔でつながる方法を事前に話し合い、「ありがとう」を伝えるやハイタッチをすることができるものを集会でしようと決まった。子ども達は、たくさんの友達とつながることができるものは何か考えながら話し合いに参加し、資料5のような意見が出された。しかし、今回の話し合いでは、賛成反対の意見が多く出され、同じ内容が繰り返し意見として出されたため、時間内に決定することができなかつた。そこで、最後は、教師が司会役を務め、それぞれの意見の良い所や心配な所を話し合い、多数決で伝言ゲームに決まった。

出し合う	児①：バレーボールがいいと思います。 児②：チームおにごっこがいいと思います。 児③：伝言ゲームがいいと思います。 司会：たくさん意見が出たので、それぞれの賛成・反対の意見をお願いします。 児④：バレーボールに賛成です。点を取ったときにハイタッチや声かけができるからです。 児⑤：チームおにごっこに賛成です。助けたらありがとうが言えるからです。 児⑥：伝言ゲームに賛成です。成功したらみんな喜んで喜ぶことができるし、勝ち負けがないからです。
比べる	児⑦：バレーボールは苦手な人が楽しくできないかもしれないからです。 児⑧：ありがとうはどのゲームでも言えるけど勝ち負けがなくて楽しめるのは、伝言ゲームだと思います。
決める	教師：同じ意見が繰り返し出ていて、決まりそうにないので、それぞれの遊びの心配なところを教えてください。 児⑨：バレーボールとおにごっこはケガするかもしれない。 児⑩：苦手な人がいる。 教師：では、心配な意見がでなかった伝言ゲームはどうですか。

資料5 話し合いの流れ（抜粋）

下線部アを行うことで、集会の内容を考えやすく、話し合いの中でも「つながる」を意識した内容が多く出されたと考える。また、前回までの集会を振り返り、課題を明確にすることで、今までの自分たちの遊びにつながるためのルールを加えた意見や自分中心の意見よりもクラスのことを考えた意見が多く出されるようになったのではないかと考える。下線部イのようになったのは、話し合いの進め方への指導が不十分で、集会でする内容の良さや心配な点を比べることができなかつたためと考える。話し合いの中で「決める」段階を位置づけ、出された意見を集会の目的に沿って比べる話し合いが必要であると考え。また、同じ内容の繰り返しを防ぐために、出された意見を集会の目的に沿った視点で板書にまとめ、何を話し合っているのか整理しやすくする板書の工夫も必要であると考え。



#### ④ 実践

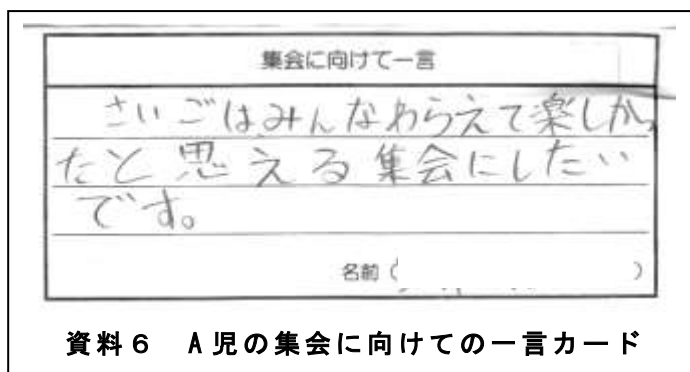
資料6のように「自分がどのように集会にのぞむかのカードを一人ひとりが書いて集会を行った。少人数のグループで簡単な内容から繰り返し伝言ゲームを行うことで、友達と一緒に喜ぶ姿が見られた。最後は、資料7のように大人数のグループで挑戦し、「伝言ゲーム」を終えた。資料6で「楽しかったと思える集会にしたい」と書いたA児は、前回の集会では、苦手なドッジビーで消極的な姿が見られたが、今回の集会では、伝える役や最後に聞き取る役にもなり、間違っても誰かを責めるというようなこともなく楽しく集会に参加する姿が見られた。

これまでの集会は、勝敗のつくものが決定されてきたが、勝ち負けのない「つながり」を意識した集会に望むことでA児も楽しく参加できたのではないかと考える。また、下線部アのようにすることで、友達へのかかわり方の見通しをもつことができ、活動への意欲を高めることができた。

#### ⑤ 振り返り活動

A児が友達にもらったありがとうカードには、資料8のように「間違えたことも楽しんだ様子」が書かれていた。また、A児以外の子どもたちの友達にもらったカードにも「分かるまで教えてくれてありがとう」や「順番をゆずってくれてありがとう」など友達とかかわることを喜ぶ記述が多く見られた。また、以前の振り返り活動に比べ、カードを書く枚数が増え、たくさんの友達にありがとうを伝える子どもの姿も見られた。

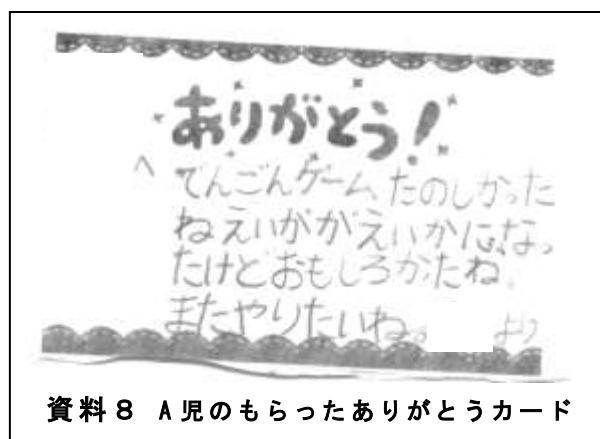
下線部アのようにしたのは、資料6のカードを書くことで勝ち負けではなく友達とつながるための集会であると意識することができたからではないかと考える。また、振り返り活動を定着させたことで、子どもたちがつながることの良さを感じ、下線部イのようにカードを書く枚数が増えたことにつながったと考える。これらの姿が、まさに、人間関係を広げる子どもの姿である。



資料6 A児の集会に向けての一言カード



資料7 伝言ゲームの様子



資料8 A児のもらったありがとうカード

## 9 成果と課題

### (1) 全体考察

実践を終えて、アンケートを実施したところ、当初のアンケートと比べて図4のような変化が見られた。「なかよく・楽しいクラスにするために何人の友達と仲よくできていますか」という質問に対し、6月は半数以上の子がクラスの半分以下の友達としか仲よくできていないと答えた。しかし、12月のアンケートは、6月に比べ、かかわる友達の数が増えたと感じる子どもが増えていることがわかる。また、「どんな時・どんなふうに力を合わせているか」という質問には、「いろいろな友達に声をかけて遊んだ」や「みんなが協力できる遊びを考えた」など、自分中心から相手意識をもったかかわり方に変わっている。このことは実践Ⅰ・Ⅱを通して、みんなが仲良くなるためにクラスにどんな課題があるか考え、話し合いを行い、集会を行った後、「ありがとうカード」によって友達とのかかわりを視覚化し、いろいろな友達とのかかわりが増えていることを子どもたちが自覚することができたからではないかと考える。

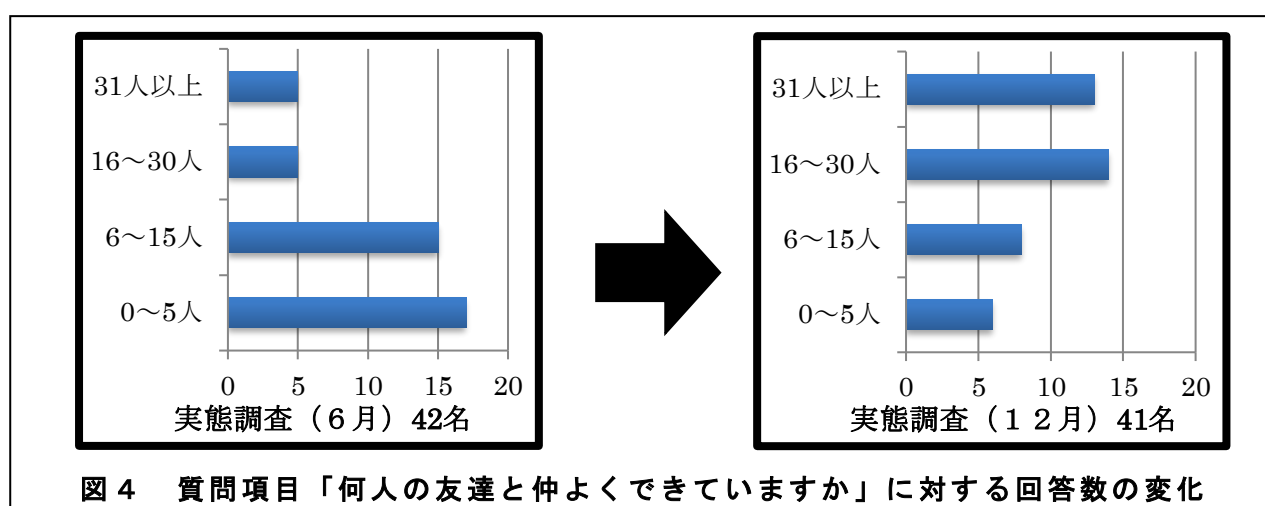


図4 質問項目「何人の友達と仲よくできていますか」に対する回答数の変化

### (2) 研究の成果と課題

- 「ありがとうカード」を活用して友達とのつながりを視覚化することで、人間関係の広がりを実感することができた。また、友達からカードをもらうことで、どのようなかかわり方が人間関係を広げるのか考えることができた。
- 「ありがとうカード」を使った振り返り活動を定着させたことで集会の目的を意識して活動することができ、「ありがとう」カードの枚数が増えることで活動への満足感や、もっとみんなと仲良くなりたいという思いをふくらませることができた。
- カードが増えない子や意欲の高まらない子どもの姿が見られた。視点のたせ方やカードの形式を工夫することで友だちからのかかわりを視覚化する必要があった。
- つながりを実感することの苦手な子どもに対しての手立てが不十分だった。「ありがとうカード」だけでなく集会を終えての感想を書くなど子どもたち一人ひとりの集会に対しての思いも把握する必要があった。

### <参考文献>

- ・ 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」
- ・ 国立教育政策研究所 「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」